

『完本丸山健二全集』刊行記念インタビュー ③

文学界の巨匠が自由自在に己を語り、作品を語る

文学好きの父

柏船舎編集部（以下「編」） 先生は現在長野にお住まいですが、お生まれもこちらですか？

丸山健二（以下「丸」） 長野の飯山で生まれたんだけど、親父の転勤でここ（長野県大町市）に越してきたんです。親父は高校の国語の教員でした。

編 親父は文学青年でね。授業で国語を教えて、家でも文学をやるんです。『夏目漱石全集』は、刊行の度に買っていました。

編 全集が流行った時代でもありましたね。

丸 そうそう。親父はそういうのを全部買っては、端から端まで読んで、家族なんてまったく眼中にありませんでした。頭の中は文学でいっぱい。

編 本に囲まれた環境だったんですね。

そんなの文学じゃねえだろうと、もう馬鹿にしたの。

編 ただ、親父がたまたま一冊だけ外国文学を持ってた。それがメルヴィルの『白鯨』でした。難しいんだけど、それを読んで、「これが文学だ。これ一冊あればほかは読まなくてもいい」と思った。

編 芥川賞受賞の時、ご両親はどんな反応を？

丸 芥川賞のことは知らせてなかった。偶然、テレビで見た親父とおふくろは、二人でぶるぶる震え上がったみたい。喜ぶどころか「あいつ、また悪いことをした。きつとこれは盗作だ！」って（笑）。

編 ええっ！

丸 どうやら盗作じゃないとわかったのは、二作目の『雪間』を読んだ時。あれはおふくろの田舎の話なんです。おふくろが、「あつ、これはうちの話だ」と気付いてくれた。

編 柏船舎代表 山本光伸（以下「代」）あれはいい短編ですよ。先生のお母様の話でしたか。

丸 ええ。でも親父は憮然でね。あんな非文学的で、しよつちゅう警察のお世話になるような野郎がって。親父は高校の補導係りだったから、俺が殴り合いで警察に呼ばれる度に俺を引き取りに来ていました。



インタビューを受ける丸山健二先生（2018年5月）

ど、みんな伐採して何にも使い道がなくて。

それで、俺があんまり悪いことするもんだから、親戚で相談して、「あいつは悪いから、ここに住まわせよう」と（笑）。

編 そんなに悪かったんですか？

丸 暴力団に入らなかつたのが不思議なくらいです。親戚は俺に豚を飼わせようって話してたみたい。動物相手の養豚業は一日も休みがないから。

特殊学級で過ごした子ども時代

丸 小学校二年生までは普通の学級だったんだけど、三年生の時に、特殊学級に入れられました。どうして特殊学級なのか誰も何にも言わなかったけど、どうも性格が異常だと思われたみたいだね。

一番覚えてるのは、皇室の誰かが死んで、もう戦後何年も経つのに、先生が東京のほうに向かっ

て。それが、俺が盗んでくると（笑）。

編 面白いですね。

丸 特殊学級だからって理由で、他のクラスのやつらに苛められる子もいた。そういう子を見ると、俺は誰にやられたのか訊いて、それをボロボロにしてやるわけ。当然、苛めたやつも親や先生から文句が出る。でもうちの担任の先生は「苛めた方が悪いに決まってるだろう」と俺をこぼしてくれました。

編 いい先生ですね。

丸 それで俺は調子に乗っちゃって。弱い者をかばうって癖がそこついた。

文学とは接点のない無線通信士の学校へ

丸 俺は出鱈目に喧嘩したことはないし、弱いやつを苛めたこともない。けど子どもの頃からそんな調子だったから、中学にあがっても喧嘩ばかり。教師をしている親父が警察に何度も呼ばれてね。

編 結局、悪いことができないようにと、仙台にある無線通信士になるための学校に行かされました。当時、造船業とか海運業が盛んで、丸山もアルファベットも知らなくて、他の学校に転校した時に恥をかいたけどね。

食事のあとには昼寝の時間があったの。葉布団がのったベッドがずらーっと並んだ部屋に、石炭ストーブがあって、石炭は一クラス一日さる一杯で決まっていた。それが終わったらおしまい。

石炭が少なくなると先生が、「丸山、ちよつと石炭もらって来い」って言うんです。「いいんですか？」って訊いたら、「いいんだ、命

のほうが大それたからな」って。それで、俺が盗んでくる（笑）。

モールのトンソーだけで。今ワープロを使ってるけど、そのおかげでこれがまた早えんだ。それ以外には何にもいいことなんてない。結局その学校でも、俺があんまり悪いんで持て余された。

編 そんなに悪さをしたんですか？

丸 俺ら十三期生っていうのは、全国から集まった特殊な連中。すこいやつばかりだったんです。「すこい」というのは、「エリート」ということ？

丸 いやいや、すこい「ワル」ばかり。

編 そっちですか（笑）。

丸 いいやつもいた。東北大学の医学部行つたやつは、授業中にこっそり別の教科書を出して勉強してた。今じゃ貧乏人からお金取らないこと有名な立派な医者です。博士になったやつもいます。

とにかく俺が手に負えないって追い出した先生たちは知恵を絞った。ある日、先生に「モスクワの民族大学って知ってるか」と訊かれたんです。

編 民族大学？

丸 モスクワ大学なら聞いたことがあるけど、民族大学なんてのは知らなかつた。当時、共産圏のソ連に、貧しい国の学生を集めて共産主義思想や経済政策を教え込む学校があつたんです。うちの学校は国立だったから、留学生として何人か送られたんです。

場で合格。試験もやらないで？

丸 おかしいなと思つたら先輩社員に、「何しに来たの？もうじきこの会社潰れるよ」と言われた。

編 ひどい話ですね。

『夏の流れ』執筆秘話

丸 その会社は組合が強くて、毎日ピケ張って、すつたもんだの大騒ぎです。だから仕事もあんまりない。電信室ってところに、九時から五時までぼーっとしているだけ。

それで、はたと思いついたわけ。この時間を利用して小説を書こうと。電信室ってのはものすこいガチャガチャうるさいから防音室になつてるんです。別の部屋にいる課長は時々様子を見にくるだけ。

小説の書き方なんて全然わかつてなかつたけど、通信士の文章はわかつてた。正確で短く。この二つさえ揃っていればオーケー。

編 文字数で通信料が決まりますものね。

丸 自然と、短くても内容

が伝わる文章を書く技術が身につきました。あとは、何を書くか。親父が好きだったインテリの悶えのよなものだけは絶対に書かないと思つてた。

編 そこで書かれたのが『夏の流れ』なんですね！

丸 勤務中だから、いくら何でも机に原稿用紙出して書くわけにいかない。会社の原稿箋の上にはぼろ紙を置いて隠しながら、会社のボールペンで書きました。隣の席の女性に、課長が来たから教えてくれと頼んで、彼女が「来た」って言うのと、ぼつと隠す（笑）。

編 その女性も大変ですね。

丸 それが今のうちのかみさんです。

編 えーっ！ その時から二人三脚なんですね。

一作目での芥川賞受賞

編 芥川賞受賞の連絡は、どのように受けられたのですか？

丸 文藝春秋からは、発表の日はいつでも電話に出られるように、必ず電話の近く



丸山健二先生（左から二番目）、柏船舎社員と代表山本光伸（右）札幌市の柏船舎にて（2018年10月）